

ジョン・クラーク教授について

四方田 犬彦

二〇〇二年六月二十九日にシドニー大学の美術史家であるジョン・クラーク教授が来日し、本研究所で講演をされた。続く三十日には横浜国立大学教授で、岡倉天心論やゴッホ研究で知られる美術史家の木下長宏教授と、本学芸術学科で日本美術を担当している山下裕二教授、それにわたしを交えて、三人がクラーク教授のアジア美術の近代性をめぐって提起した問題を受け止める形で個別の発表を行ない、教授がそれに応えるといったシンポジウムが行なわれた。クラーク教授は今日、アジア美術研究において世界的に第一人者の一人であるが、ともすれば西欧美術と日本美術といった二項対立のなかでしか美術史の言説が成立しておらず、いまだに不毛な「脱亜入欧」のまね事をしているこの国においては、ほとんど紹介される機会がなかった。この場を借りて、教授の簡単なプロフィールを描いて

おきたいと思う。

ジョン・クラークは一九四六年にイギリスで生まれ、一九六九年から七二年まで東京大学大学院で美術史を学んだ。帰国後、ロンドン大学でしばらく教鞭をとっていたが、その後オーストラリアに渡り、国立オーストラリア大学を経て、現在はシドニー大学教授としてアジア美術史の教鞭をとっている。筆者とは一九八五年にオックスフォードにあるアシュモリアン美術館で開催された *Reconstruction: Avant-garde Art in Japan 1945-65* という、戦後日本美術を検証する展覧会のシンポジウムの席上で初めて出会った。日本のネオダダ運動が、本場ヨーロッパのダダやシュルレアリスムについて、いかに乏しい情報しかもちえなかったにもかかわらず、またそれゆえに独自の創造性に到達できたかという問題をめぐって、情熱的に語っていたことを、

印象的に記憶している。アジアの近代美術や前衛運動はけっして欧米のチャチな模倣などではなく、独自に美術史的現象として検討すべきであるという教授の基本的姿勢は、はやくもこの時期において確立されていたといえる。一九八九年には『一八五〇年から一九三〇年にわたる、日本イギリスの美術界における相互交流』という論文を発表。明治期の東京に滞在して『ジャパン・パンチ』を創刊し、諷刺画に健筆をふるったチャールズ・ワーグマンを研究したものである。だが、こうした真面目なアカデミズムの探求とは別に、日本文化をめぐる教授の飽くことのない好奇心は、上村一夫から榊まさる、『カラテ地獄変』といった漫画の分析、小津安二郎の研究、さらに雪舟と同時代のオランダの画家ファン・デル・ワイデンとの比較といったぐあい、次々と広範囲な対象をめぐる論文へと結実していった。また同年には『一九六四年から六九年における、日本の外交方針とヴェトナム戦争』という、外交史、政治学をめぐる論文が執筆されている。一九九一年には国際オーストラリア大学において『アジア美術におけるモダニズムとポストモダニズム』と題するシンポジウムを主催。日本、韓国、中国、台湾、タイ、インドネシア、シンガポール、そしてオーストラリアの研究家を一所に集めて、五日間にわたって発表と討議を重ねた。ちなみに筆者も、鎌倉近代美術館の酒井忠康氏、美術評論家の中原俊介氏とともにこれに参加し、その全結果は『アジア美術における近代性』という書物として一九九三年に刊行

された。一九九三年に司馬江漢をめぐる『十九世紀に本の銅版画』を世に問うた教授は、その後、京都の日本文化研究所に滞在し、九七年には長大な序文と註釈をともなった、丸鬼周蔵『いきの構造』の英訳を完成する。そして翌九八年には、これまでの研究の成果を纏めた『近代アジア美術』(Modern Asian Art, Chatman House)を刊行する。大判で三五〇頁に及ぶ大著であり、教授のこの方面で第一人者として強く印象づけることになった書物である。論じられているのは「インドス河より東」のアジア美術に欧米の近代美術がどのように影響を与え、そこからアジア近代美術がどのように立ち上ほってきたかをめぐる、比較美術史的考察である。母国語である英語は別にしても、日本語、中国語、タイ語にきわめて堪能な教授にしてはじめて可能となった、前代未聞の規模と理論的な真摯さを備えた書物であり、これまで欧米でほとんど無視されるか軽視されてきた、日本を含むアジア近代美術への深い共感と洞察力が、頁の端々から強く伺える。さらに教授は、個別研究として始められたワーグマン研究の延長上に立つて、二〇〇一年には『一八五〇年から一九三〇年におよぶ、日本のイギリス、ヨーロッパ、アメリカとの美術交渉』と題して、莫大な資料集を編纂している。

今回の講演は、教授の大著『アジア近代美術』の方法論的要約にはじまって、一九九〇年代にアジアのあちらこちらで生起している美術運動へのアクチュアルな言及を含む、きわめてボレミックな内容をもったものだった。シンポジウムの席ではエ

ドワード・W・サイードの理論的評価をめぐって、筆者と教授の間で大きな意見の相違があり、スリリングな応酬が交わされた。『アジア近代美術』は、日本においてこそ本格的な紹介と翻訳が待たれている書物であり、この講演を契機として日本の美術史家が大きな知的刺激を受けることを期待したいと思う。